三河アララギ

平成三十年　2018年

六　月　号

第六十五巻　第六号

ニューヨーク日記（140） http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

Blue Shoe Diaries

海の香り！ はいはい、またマイアミに来ちゃっています。家から見えるピアーにあるフレッシュシーフード美味しいの！ 砂浜を歩いて到着！っで私達日本人だからポン酢とゆず胡椒持参。カキにはやっぱりポン酢だよね～ 今度は葱も持ってくるぞ！ 美味いものは美味く食べましょう！

Scent of the ocean! We're in Miami again! There's this little hut on the pier that you can see from our condo that has the best fresh seafood! We go there by walking on the sand. And since we are foodies that we are, we bring our own ponzu sauce. There's nothing better for fresh oysters!

目次

第六十五巻第六号（通巻七七四号）

表紙・大菩薩嶺　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（140）　Blue Shoe（2）
黄素馨の門　御津　磯夫（4）
三河アララギ歌集Ⅴ　大須賀寿恵（5）
歌集「續草々」　今泉　米子（6）
三河アララギ歌集Ⅴ　河原　静誠（7）
「清明」の季　岡本八千代（8）
彼岸会　弓谷　久子（10）
静静と　今泉　由利（12）
黄金の手　安藤　和代（13）
裏窓を　清澤　範子（14）
惜しむ　伊藤　忠男（15）
太陽邁進　阿部　淑子（16）
一念発起　足立　晴代（17）
暖簾　森岡　陽子（18）
木香薔薇　白井　信昭（19）
目標　杉浦恵美子（20）
二人静　山口千恵子（21）
歌集「夢のつづき」　水上　信子（22）
「啄木歌集」　今泉米子選（23）
贈呈誌　森岡　陽子（24）
『ことよせ』　いーはとぶ　三田美奈子（26）
水野　絹子（26）
牧原　規恵（26）
稲吉　友江（26）
鈴木美耶子（26）
吉見　幸子（27）
牧原　正枝（27）
石田　文子（27）
森　厚子（27）
山﨑　俊子（27）
現代学生百人一首　東洋大学
松岡　陽菜（28）
秋中　薫（28）
高　義尚（28）
原　汐里（28）
山中　実祐（29）
中村　玲菜（29）
矢岳　梨花（29）
樋口　諒（29）
童謡　あじさいさいた　高橋　育郎（30）
『俳句』　山元　正規（32）
森岡　陽子（32）
田中　清秀（32）
浜田　紀政（33）
松本　周二（33）
重野　善恵（33）
今泉　由利（34）
柳田　晧一（34）
山迫　京子（34）
植村　公女（35）
杉浦　弘（35）
今泉　如雲（35）
田中　清秀（36）
丸山酔宵子（38）
かさね吟行会
『酔いの徒然』（74）　大橋　望彦（40）
ある自然科学者の手記（73）　江上　浩二（42）
「江上浩二の独り言」　今泉　雅勝（44）
絹の話（91）　山本紀久雄（46）
楽しい時間（67）　平井　茂行（48）
漢詩研修（二十）
『良寛様の和歌・晩年の恋』　中屋　保之（50）
『歴代天皇御製歌』（八十九）　貫名海屋資料館（52）
御津磯夫短歌鑑賞　鮫島　満（54）
「氷魚」のことから（209）　岡本八千代（55）
みなさまへ⑮⑯　磯辺　耐（56）
編集室だより（二〇一八年四月）　今泉　由利（58）
野菜・まんだら（4）　森岡・今泉（59）
「三河アララギ」について　（60）

黄素馨の門（昭和四十一年～昭和四十四年）

御津磯夫

まろくして黙く生まれて水あさしわれと罪なきおたまじやくしら

おそひ来む水爆よりもたのしくて雀の鉄砲の田を分けてゆく

八重ざくら散りしも厚くベルツの碑めぐりつつふむふたたびみたび

石段にはや汗ながれ立ちどまる下草なべてこれぞ山藍

いくたびのとほき御幸に刈り刈られ山藍けふのしげりあり

山藍の春のしげりにこころたりて丹波の見ゆるところへゆかず

岩走る水とこしへに山はあり延（は）へはびこりてしげる山藍

矢の根なき白羽すがしき神の矢を健忘の子の病室にさす

豊川の若鮎を煮て見にゆかむ窓ながき住吉の子を

黄素馨のすぎたる花の黄まつはりて南青山と町の名かはる

三河アララギ歌集Ⅴ

大須賀寿恵

目覚めたる今朝動悸なし窓にふれて葉ずれやさしきまそほの芒

庭に据うる金魚の甕の水の上に梅雨の晴れ間のいささかの風

清々と老いてゆきたしこの宵も泡立てて洗ふわが白髪を

今一度素肌に浴衣着てみたしギブスコルセットのマジックを締む

へちま忌と思ひつつゐし夕べにて遅きへちまの明日咲く雌花

洗はむとする体操服のポケットより出でたる小石は子の宝物

夏休み過ぎてふた月虫籠に首なくなりしくわがた二匹

水霜の今朝あたたかし大輪の菊の花よりも陽炎の立つ

汲み置きの馬穴の水を横ぎりて流れゆきたり冬雲ひとつ

坐り葉となりし苺の緑葉はいつしか紅く朝々の露

歌集「續草々」

今泉米子

さながらに花櫛なして淡紅（とき）いろのヒマラヤ雪の下といふ花

ひねもすのふかき曇りの暮れむとして西の茜の一條の雲

十勝より来たりし種子と指し仰ぐ花房垂るる若葉白樺

深く浅くハカランダの種子を埋めゆく日本の黒きわが庭の土

ハカランダの翅ある種子は滑りつつ土に舞ひ落つ我の指より

貝に似る二枚の殻の間より舞ひゆかむとすハカランダの種子

紫の雲の如くに棚引くと蒔くはブエノスアイレスハカランダの種子

裾ひきつつサリーの長き婦人らもわれも交りぬ花の御苑に

気根垂るる巨き銀杏はまだ萌えずめぐる御苑の木立しづけし

人ら来ぬところに一木ほのぼのと花みづきの花枝ひろぐ

三河アララギ歌集Ⅴ

河原静誠

鈴蘭の花咲く庭をめぐり歩む円頭黒衣の尼のわれらは

寒山拾得のほほゑむ画像に真向ひて夏の安居の討論を終ふ

日に三度省みよとぞ教はりぬ鏡に映るは青き円頭

香を炷き塔婆を書くは盆月の尼僧のわれの常の業なり

朝の花夕べの花と匂ふ庭弥陀の浄土と深呼吸をする

一つ石に刻める六体の地蔵尊幡を持つあり珠持つもあり

苔むせる六角柱の六地蔵吾の兼務の十王堂に

吾が為に山の媼の摘みたまふ薬草七種を今年も飲まむ

朝早く吾は六地蔵尊拝みにき病む肺結核の治癒を祈りて

薬草を冷茶と思ひ吾は飲む薬師如来のダラニ称へて

「清明」の季（とき）

蒲郡　岡本八千代

われにあるこの一（いち）日の大切さ思ひつつ仰ぐ「清明」の空

木々の芽も庭の千草も萌え出だし緑一面の「清明」の季（とき）

やはらかき緑葉美（うま）し見に来よと呼ぶ人もなくただ庭の中

一人（ひとり）ゐて二人（ふたり）の如く今朝もまた君の遺影に声をかけつつ

われありてどの部屋部屋も孤独の部屋哲学の部屋と思へば愉し

けふも独り独りに馴れて来たるらし甘きものしゃぶりて本を読みつつ

雨ふらばひとり静かに家にゐる過ぎにし日々のすべて懐かし

父母(ちちはは)の子はわたくしのたゞ独り憶(おも)いは日々(ひび)に遠くなりつつ

なんとなく君を慕ふるこころにて見上げし夜空に淡き眉月

この夜半もひとり静かに白湯を呑む湯気ほのぼのとわが頬にさへ

わたくしの生きてゐるかぎり君のこと永遠(とこしへ)の人と今夜もおもふ

台所に立ちておのづと鼻唄をうたひだす唄「りんごの唄」ばかり

今日もまた我に新しき朝の来てま白卯の花を仏前に供ふ

「永劫の時間のなかの一秒の」ああ御津先生の御幅のお歌

今届きし二通の手紙のうれしかり二通ともども夫とわがこと

彼岸会

豊川　弓谷久子

はやばやと今年の桜は散り初むるみさとは今朝が初出勤

勤務先は名大病院向ひ合ふ鶴舞公園馴染みも深し

初出勤の子を見送りし遠き日をみさとと重ぬる想ひは深し

恒例の花見と言ひて子は行きぬ桜散りたる岡崎公園

さきがけて黄のチューリップ咲き出し次は真紅の夢ふくらむ

骨折より今日にて一年痛み無く暮せる日々の有難きかな

東京は又大荒れか久びさの雨は嵐となり吹きつのる

パジャマの上ベスト重ぬる春嵐あとは寒さが戻り来し

白菊に霞草添えたり夫の墓一月おくれの我が彼岸会

菩提寺の庭に佇づみ去年逝きし御庫裏様の面影偲ぶ

祭りにと招待受けたり雨上がり道歩み行く雨傘杖に

祭り囃子が真近くなれば心浮く広幡神社の幟はためく

高値続きも一段落か買ひ来たるキャベツは重し我が手に余る

ロールキャベツ食べつつ話題はこの冬の野菜高値の苦労話よ

とりどりの花咲き満ちて我が庭は春爛漫となる四月の尽を

静静と

東京　今泉由利

私に積もる花びら幾(いく)いくつ静静(しずしず)として零(こぼ)さぬように
マイアミに太陽沈むと知らせこし朝日射し初む私の窓
富士山の溶岩階段かけ登り心にまみゆ木花咲耶姫命
星々の生まれぬ宇宙もあるといふ星々のあり私の宇宙
１３１億年かけ今届くと私の窓のどの星だろふ
若緑ハウチワカエデの木下(こした)にて一筆(ひとふで)一筆(ひとふで)大菩薩嶺
はるかなる宇宙のことも深海も刻々着信スマートフォンよ
大菩薩嶺辺りを水系に多摩川流るる多摩川橋にて
大地より五段のぼりて家に入る私のままの私の居場所
稲荷社と若一王子と金輪寺と抱かれゐたる今日の安心

黄金の手

豊川　安藤和代

花好きが逝きて十年夢のごと父ちゃんそちらも満開ですか

用水の流れゆく先友の住む町へつづくとながす笹舟

好物も今はひと口病む夫に〝ガンバレ〟言えず手をにぎりしむ

力なくにぎり返した夫の手は家族守りた黄金の手よ

誕生日孫のくれたるミニバラの今朝一輪が初夏の陽に照る

本宮は遠くかすみてうらうらと菜の花畠に蝶はあそばす

白木蓮咲けばあの人思い出す名は花子さんえくぼがひとつ

春雨にけむる山脈点ほどの高く低くと二羽の鳥ゆく

雨の音聞きつつ春の夜は更けて父に会いたし母に会いたし

今いれば古稀をむかうる妹よ「梅代」と言う名かおる白梅

裏窓を

春日井　清　澤　範　子

満開の桜の木蔭に腰おろす青草匂ふ春風吹く日
堤防の小川の水面おだやかに桜の花びらの絨緞模様
リハビリに葉桜の公園のベンチにて夫と座りて和みてをりぬ
道の辺に虎杖（いたどり）の生ふる群の中たんぽぽ咲きて黄色の絨緞
庭椿赤白混じりの花びらをそっくり落して春風の過ぐ
裏窓を北風ゆすりて通り過ぐ北の雨戸のカタカタと鳴る
貴女は花が好きとて電気店の売出しの景品にバラの一鉢
八王子神社の境内剪定されとうろう新たに左右に置かる
晴天なれど風強き今日はリハビリ散歩止めると決める
吾乗せてスーパーへ来ぬ娘の手握れば温み伝わりて来る

惜しむ

大阪　伊藤忠男

谷隔て山裾囲む茅葺きの屋根が残りし黒竹の里
常緑の葉っぱと新芽山肌を染めるツートンモヒカン刈りに
軒下にカラス突つきし干し柿の揺れるあばら家名残り雪
恒例のクラス会なり五月晴れ記憶たずねて話あちこち
穏やかな空は今のみ迫る雲日差し切れぎれ荒れる今宵は
風神の暴れし今宵春嵐鎮まり去るを祈るのみなり
土煙り車あおられ右左春の終わりか花散る嵐
ゆく春を惜しむがごとし花筏浮くでも無くて沈むでも無し
「そいでのん」後ろの席のお年寄り香るふるさと懐かしきかな
不幸なり時代錯誤の渦の中アメリカ日本ど真ん中なり

太陽邁進

横浜　阿部淑子

何(い)つの間に住みつきしかも知らぬ間の大腸腫瘍切りて別れぬ

手術日の朝のカーテン開けみれば太陽邁進見舞ふ光よ

「阿部さあん全部取ったよ終ったよ」執刀医の声に我生きかえる

肛門の痛みはつづきぬ一ヶ月間励まし言葉を励まし薬を

秋蒔きて春の収穫新ごぼう堀りたて齧る「甘いうまいよ」

一念発起

東京　足立晴代

我よりも年老ひたる方々の夫々衣裳召したる姿
うらやまし一念発起装はむ昔の元気取り戻さむよ
支えられ歩く姿は悲しくて残念残念くやしく思ふ
頼る杖ヨタ〳〵歩く我なれど両足軽くなるのはいつか
楽しみて笑顔忘れず睦みあひ頑張る日々は続いているよ

暖簾

東京　森岡陽子

故郷のなまりの聞ゆ特産展ほたる烏賊並ぶ富山県人気
春燦々亀列なして浮き杖に甲羅干す下鯉は生き生き
公園の窓口の人声かくる鶯鳴くよ右に行けよ
川風に揺るる提灯花まつり老人若人ぞろぞろぞろ
一とつ又一とつ又と明り消ゆ祭りの終る川に花筏
届け来る校舎の印あるクッキー缶入学式の制服姿
源平の花桃咲くは校門に新入生等並んで写真
着物地の暖簾をくぐる天ぷら屋花街名残向島辺り
手を合す神社に並ぶ赤鳥居奥に鎮座の阿吽の白狐
華やかな花盛り過ぐ墨堤に蒲公英すみれおとなしく咲く

木香薔薇

豊川　白井信昭

相楽なる内越の蜜柑ひと袋イヨカンネーブル味のよきかな
妻とのむ今朝の熱熱ポットの湯気頬にうけつつ一杯緑茶
剪(き)りつめしわが木香薔薇のめぶけるを一昨年(おととし)の如昨年(こぞ)の如くに
堤防下隣れる家に咲き盛るソメイヨシノとヤマザクラあり
凪ぎゐたる遠州灘の潮見坂漁船あまた沖合に見ゆ
バイパスをひた走りつぎ見晴るかす御前崎なほ遠くありたり
川口なる夜のマリーナ紫にネオンは灯る突堤先まで
み社の葉替えの季と境内に音響かせて替え葉ふきよす
豊川の放水路近く咲き残る蓮華草田んぼ鮮やかに
田の畦に蓮華の花つむ我と妻昔懐かし暫しの間

目標

蒲郡　杉浦恵美子

我が庭にも等しく春は訪れぬ牡丹咲きたり手入れせずとも
訪ふ人もなき我が家にも等しなみ春盛りなり牡丹大輪
焼酎を一本貰ひ受けたれど当惑しをり夫居ぬ今は
夫ならば相好崩して飲み干さむ貰ひ受けたる焼酎一本
この地下にいにしへ都が眠れるか桜満開難波宮跡
もう今は入学式やら始業式関はりなけれど何かそわそわ
新年度四月に始まるこの慣ひわたしの暮しに馴染んでゐるよ
年毎に目標小さくなりにけり然も達成し易きことども
排水管にぐいぐい詰まりし木の根っ子まるで大蛇の抜け殻のよう
排水管に水を求めし木の根っ子側根びっしり鈍き銀色

二人静

豊川　山口千惠子

コンクリートの通路に添ひて掃きてゆく祭礼迎ふ鎮守のお庭
紅に大きく開く芍薬よ夕べになれば花びら閉ずる
朝採りて友の持ちくれし筍を茹でゐる香り厨にみつる
軽トラの荷台にころがし筍を友は山よりわれに持ちこし
瑞々しき筍の皮はぎてゆくたけのこ御飯を夕餉に炊かむ
わが庭の花々一時に咲き過ぎて今は盛りなり木香薔薇が
もうすでに庭の木蔭の一処しめてのびゐる二人静は
ひそやかに二人静の花の咲く二本の花穂の白鮮やかに
窓の辺に楓の葉より雨雫昼より雨の予報の当たる
指先のひび割れにクリームすりこみて今日の仕事はここまでとする

歌集「夢のつづき」

水上信子

東より茜の空の色増してあふるるごとく光射し出ず

昇りくる朝日を浴びて輝ける仏塔にしばし我も同化す

コーランの流るる真昼の街中は人の行き来のただ忙しかり

祈る人の姿の見えぬ街中をコーランの声ただ流れおり

南国の旅の楽しみ食にあり朝昼晩にマンゴーパパイア

雪晴れの滋賀の山寺登り来て遠き湖空と見紛う

靴裏に霜柱踏む感触あり太極拳舞う広場の朝

清水坂登りながらに思いしは大き決断いらぬ齢なり

少しづつ思い出消してゆく日々の記憶の底に光る石あり

門限を気にかけつつも盃重ぬ浮世の夜への思い愛しき

「啄木歌集」

今泉米子選

頬につたふなみだのごはす一握の砂を示(しめ)しし人を忘れず

いのちなき砂(すな)のかなしさよさらさらと握(にぎ)れば指のあひだより落つ

眼閉(めと)づれど心にうかぶ何もなし。さびしくも、また、眼をあけるかな

遊びに出て子供かへらず、取り出して走らせてみる玩具(おもちゃ)の機関車。

考へれば、ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。煙管(きせる)をみがく。

ある日、ふと、やまひを忘れ、牛の啼く眞似(まね)をしてみぬ、妻子(つまこ)の留守に。

たゞ一人(ひとり)のをとこの子なる我はかく育てり。父母もかなしかるらむ。

こころよく我にはたらく仕事あれそれを仕遂(しと)げて死なむと思ふ

贈呈誌

冬雷五月号

○屋根の雪時を掛けつつ解けてゆき雫は庭に気怠いリズム　嶋田正之
○左手の伊吹嶺いつか右に在り冬の尾張野駆けゆく楽し　澤木洋子
○飛びきては波に浮きをり群なして鴎は突如飛び立ちて行く　池亀節子
○からたちの木に萎びたる実の一つ残れるままの白秋生家　森藤ふみ
○雪の日も耐へてきたるやゆずり葉の温き日射しに艶めききたり　山崎英子

鹿児島アララギ４月号（第八〇一号）

○落ちさうで落ちぬ垂氷（たるひ）の先端の凍りきれずに留まる雫　千葉源治
○青く澄む海に真珠筏は日に映えて九十九島を遊覧船に巡る　武重盛ヒサ子
○ガラス越しに小鳥の遊ぶ姿見ゆ山茶花の白き花こぼしつつ　月精薫

○星降る夜静かな曲の流れ来て羽生選手のスケート終はる　中尾千賀

○てのひらにむきし林檎の香が匂ひ昼には早き独りの食事　山本和男

秋楡第九八号

○ねんねねんねと撫でやりて猫を眠らす外の面は雪なり　三原香代

○巡りゆく糺の森に原生林太古のごとき植生残る　加藤和子

○玄関に水仙あわく匂いおり二日を留守にしたる暗がり　木村郁子

柊（北陸アララギ会）四月号

○快く置かせてくださる空地あり捨て処なきわが家の雪を　阪井奈里子

○しんしんと降る雪深くしづもりて街のとよみもここにはきこえず　大矢稚子

森岡陽子

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

半月板損傷なんてたしかにね八十路の試練かよろよろ歩く　三田美奈子

お彼岸に家族そろひて経を読む庭の金雀枝（エニシダ）ほのかにかほる

ぬくぬくと春の陽浴びて幡豆の道車漫ろに走らせてゆく　水野絹子

土筆摘むは祖父母と孫らか包む陽の光（かげ）柔らかに東光寺遺跡（あと）

満開の君の育てし桜の下うからら集ひて君の喜寿祝ふ　牧原規惠

わが畑の花も野菜も木々たちも一雨毎に緑青々

東（ひんがし）の光溢るるリビングで嬰子抱きぬこの愛しさよ　稲吉友江

ブロック塀の上の白猫大きなる欠伸一つすこの春のうらら

わがスマホに今もいきいき「老いの夢」功先生のああ最期の絵　鈴木美耶子

まう誰も住まなくなりし隣家は音をたてつつ毀たれてゆく

池坊の学院の友らとおだやかに作品作りに我をも忘れて
依頼されし福祉まつりのお茶の会五百余名の抹茶点てをり

吉見幸子

あの道へいつものやうに曲がれない馬場（ばんば）あたりのここの細道
はば広き行間に先生の歌並ぶこの三月号を読めばかなしも

牧原正枝

あかときに雨の音して耳すますまたまたふとんの中にその音
新しき黄（きい）の帽子の男（をとこ）の子はにかみつつも吾に「お早よう」と

石田文子

目の前にしだれ桜の花の道手をかざしつつ友と歩きぬ
桜さく岬の台の鐘つけばひびきてわたる海のうららに

森厚子

白花にうすみどり葉のサクラ道その花ごしに今宵十三夜
草とりのわが目の先に紫のタチツボスミレの花のひとつが

山﨑俊子

現代学生百人一首

東洋大学

絡まった釣糸のような関係を切れないように今日もほどくの

広島市立舟入高等学校一年　松岡陽奈

パソコンと向き合う日々を抜け出して人に寄りそう人生選ぶ

広島市医師会看護専門学校医療高等課程二年　秋中薫

しゃべれない患者の顔を凝視する少しだけでもわかりたいから

広島市医師会看護専門学校医療高等課程二年　高義尚

亡き母の冷えた体に触れたとき心に決めたナースになると

広島市医師会看護専門学校医療高等課程二年　原汐里

「ありがとう」死にゆく祖母の耳元にささやく母は娘の姿

香川県三本松高等学校二年　山中実祐

人参は料理をパッと輝かすオレンジ色の魔法の野菜

佐世保市立清水中学校三年　中村玲菜

朝おきて普通の日々を過ごすことそれも立派な平和学習

佐世保市立清水中学校三年　矢岳梨花

聞いてるよ言ってる君のその指は画面の上をせわしく躍る

別府市別府商業高等学校二年　樋口諒

童謡　あじさいさいた

髙　橋　育　郎　作詞

あじさい　さいた
あめが　ふってるね
やわらかな　あめだね
しずかだね
あっ　でんでんむし

あじさい　いっぱい
ぬれて　あざやか

あめのひが　にあうね
うれしそう
あっ　だれかきた

でんでんむしと　あそぼう
でんでんむしむし　かたつむり
おまえのおうちは　あじさいの
はっぱのしげみだ　またあした

『俳句』

折皺に風のアイロン鯉のぼり　山元正規

石段に千古の丸み春深し

短夜の耳をはなれぬ波の音

はにかみて園児の返事花海棠　森岡陽子

さまざまな言葉飛び交ふ花の下

惜春や片膝立つる羅漢像

郵便のなき日もありて春の暮　田中清秀

行く春や白波つづくだるま船

つつじ燃ゆ閉づる眼の奥までも

行く春や大川眺む芭蕉像
春の土賑やかなりし貸農園
母子像にしだれ桜の触るるほど

浜田紀政

ライオンのやうに春昼眠りたし
先端は未だ筍十五尺
玉の緒のまぶしきほどの楠若葉

松本周二

小手毬の白く散り敷く小雨かな
遊覧船手を振り合うて春惜む
子牛ほどのラブラドールも花見かな

重野善恵

白い花赤き実となる春深し
祈りたき心にありぬ葱坊主
満月に少し足らざり沈丁花

今泉由利

緋牡丹や花の重みに耐へてをり
行く春や空に向ひて春惜む
チューリップひとひら捩れて春惜む

柳田晧一

おみくじの四ヶ国語や山笑ふ
山頂にしばし佇み春惜む
抽斗の奥にあの日の桜貝

山迫京子

息ひとつ整えてをり花見坂
水涸の音無川や桜散る
つつきしや毘沙門堂の藤の花

植村公女

頂きに磯丸の歌碑木の芽時
土に落ちひとつはづみて白椿
点と見えそのまま消えし雲雀かな

杉浦　弘

津軽にも国学ありし若楓
お岩木と空の境や朧なる
この町に百万人の花見人

今泉如雲

かさね吟行会
「墨田公園界隈」　四月

田中清秀

大正十二年九月一日に発生した関東大地震は未曾有の大災害を東京にもたらした。最大震度七の激震だったが倒壊よりも火災による被災が多く、十万人を越える犠牲者の多くが火災によって亡くなっている。昼食準備の時間であったことに加え折から日本海を北上中の台風の影響による強風が原因だったと言われている。隅田公園はこの災害復興事業の一環として帝都復興院総裁の後藤新平の主導によって計画整備された。九十五年経った現在、公園内には七百本の桜があり毎年さくら祭が開催され、隅田川両岸の桜並木と共に花見シーズンには多くの人出があり賑わいを見せている。

今回のかさね吟行会はこの隅田公園界隈を散策した。平成三十年四月二十七日天候は晴れ、風が強い一日だった。都営地下鉄の浅草駅から吾妻橋を渡り隅田公園を抜けて向島まで足を伸ばす。名物や由緒ある神社仏閣を巡り、行く春を楽しみながらの吟行である。

かがよふや空の青さと楠若葉　周二
行く春や地図を片手に江戸探し　素山
何神か四手をゆらして桜風　由利

牛島神社は墨田公園内にあり創建は西暦八百五十九年と伝えられる古社である。社殿は関東大震災で焼失し現在の場所に移転した。五年に一度の大祭では鳳輦（ほうれん）を牛が引き五十の神輿が練り歩き多くの人で賑わうと言う。また、境内に鎮座する撫牛は自分の体の悪いところと同じところを撫でると治癒すると信じられている。「なで牛の石は涼しき青葉かな」明治初期の作家淡島観山の句碑が側に立っていた。

続いて三囲（みめぐり）神社に参拝する。弘法大師が祀った田中稲荷が始まりと言われ、土中から発見された老翁像の周りを白狐が三度回って消えた縁起に由来する。その名前から三井家の守護社として信仰を受けており、池袋三越の前にあったライオン像が寄贈されている。また、垂れ目で顔がユーモラスな狐像、柱と笠木が三本ある珍しい三柱鳥居など見るものが多くあり大いに興味をそそられた。

新緑に染まり眠れる神の牛　紀政

白狐祠や桜蕊降る赤鳥居　陽子
新しき奉納鳥居の薄暑光　さち子

見番通りを北に進むと長命寺がある。三代将軍家光が付近に来た際腹痛を起こしこの寺の水を飲んだところたちどころに治ったことから名付けられたと伝えられている。また、有名な桜餅は桜の落葉の掃除に悩まされその葉を塩漬けにしてお餅をくるんだことが始まりらしい。「延命寺桜餅」の店の案内には伊豆島崎町のオオシマザクラの葉を塩漬けにしたものを使用しており、見た目の美しさと発酵した独特の芳香を共に楽しんで欲しいと有る。ただし、葉っぱも一緒に食べかどうかはお好みでどちらでも良いらしい、昼食前だったが私は包む三枚の葉も一緒に頂いた。

向島に長寿を願ふ桜餅　京子
春うらら歩き疲れて桜餅　しのぶ
墨堤に花を散らせてつむじ風　清秀
春あらし帽子押さえて吾妻橋　れい子

昼食は「河原のあべ」（店名）の天ぷら定食、下見をした会員の計らいで楽しい食事にありつけた。少し早めに入店したが目の前で揚げる天ぷらは絶品で散策の疲れを忘れさせるに十分である、さらにサービスの取り分け番菜も旬の味でこれもまた美味しかった。

食後は隅田川沿いを歩きながら浅草方面に戻ることとなる。向島周辺にはこの他にも近江の白髭大明神ゆかりの白髭神社、拝殿の天井画で有名な隅田稲荷、川堤から発見された子育地蔵尊、松の内に巡り歩き開運を祈る七福神などまだ見所が多い、さらに在原業平の和歌から名付けられた言問団子も有名だがこれも又の機会とする。

句会は浅草駅近くに戻り今回もカラオケハウスを利用、いつもの様に嘱目三句出し四句選で行われ句作の評価と手直しを行い和気あいあいの内に解散となった。

■かさね吟行会■

日時　六月八日（金）
場所　多摩川台地・浅間神社
集合　多摩川駅改札口　十一時
　　東横線　目黒駅
申込　森岡陽子宛　(03)3712・2835

『酔いの徒然』（七四）

丸山酔宵子

『小百合さーん、覚えてますか・・』

気象庁は3月17日午後、靖国神社のソメイヨシノの開花を確認し、平年より大幅に早く開花宣言。今冬の厳しい寒さで、休眠打破（花芽が目覚める）がしっかりと引き起こされ、3月に入ってからは暖かい日が続き、順調につぼみが成長したからだそうだ。

将に今、桜の季節に、満を持したように吉永小百合の１２０作目となる映画「北の桜守」がロードショーされた。「北の零年」「北のカナリアたち」に続く吉永小百合の「北の三部作」の最終章。吉永小百合作品となるといつも話題となるが、率直に言えば、前2作は決していい出来とは言えず、最近の数作は何れも愚作ともいえる期待外れであった。しかし、小百合出演全１２０本中の大半は見ているサユリストとして、本作は本当に久々の秀作で、小百合の健気さ、美しさが画面にほとばしり、涙腺をくすぐられる熱演で、久々の感動を与えてくれた。

堺雅人が息子役で共演し、アカデミー外国映画賞「おくりびと」の滝田洋二郎監督が、戦中から戦後にかけて極寒の北海道で懸命に生き抜いた母と子の30年にわたる軌跡を、描いている。桜守している母親をやっと探し訪ねる息子に「桜は満月に満開になるの・・ね・・・」の最後のシーンの満開の桜と満月が幻想的で素晴らしい。

思い起こせば、半世紀前、吉永小百合が早稲田第Ⅱ文学部に在籍し、我が薄汚れたバンカラ学生たちが、やれ、「あの、文学部２０１号室に来るぞ・・」とか「あの喫茶店によく来るぞ・・」、「あの立ち食いそばで授業前に食べるんだってさ・・」などの情報をもとに、良く待ち伏せしたものだ。

吉永小百合はスポーツ好きでラグビーは勿論、六大学野球にはぞっこんで、よく神宮球場にはよく来ていたようだ。秋の早稲田祭。文学部横の体育館前広場には、前夜祭のイベントで多くの学生たちが集まり、仲間たちと

談笑していると、一瞬その場だけフラッシュが焚かれたような輝くオーラが漂い、紛れもない本物の吉永小百合が現れたのである。息の聞こえるような近さで、訴えるような眼差しでじっと見つめられると、「さ・・ゆり・・・さ・・ん・・・・」と、彼の憧れの小百合を独り占めの気分。後で友人曰く、近視の女性は目がいつも潤んでいて、「小百合もかなりの近視なんだよ。その気になるな、馬鹿！阿呆！」

「北の桜守」の小百合さんは、20代から70代までを演じきって、アップでの美しさは早稲田キャンパスでの出会いと変わらない。鶴瓶の居酒屋での熱燗を飲む姿も・ゆったり、まったり、美味しそう・・・。

満開の花に満月北の夜

酔宵子

ある自然科学者の手記（73）

大橋望彦

『気にする』

何かを気にする。気になる。気に入る。気を入れる。病は気から。気に病む。気が違う。気が狂う。気が乱れる。気が滾（タギ）る。気が立つ。気が遠くなる。気を張る。気を取られる。気取る。気を回す。気を利かす。気が置けぬ。気の好い。気を配る。気配（ケハイ）がする。気ざわしい。気を使う。気を揉む。気を紛（マギ）らす。気色が悪い。気（キ）を付（ツケ）る。気付け薬。（ほんの志程（ココロザシ）度の）気付（キツケ）を渡す。（着物の）着付（キツ）けをする。等々同じ気・着（き）と云うことについてみても、色々な使い方があるもので、まかり間違えば、反対の意味の表現になってしまう場合すらある。

ではここの「気」とは一体何者なのだろうか。『気』は気体の気で、空気の気でもある。然し、此処に挙げた幾つかの例で見ても、必ずしも空気とは限らないことが分かる。空気で無いがやや近い、雰囲気の気かもしれない。また気持の気とも云える。気持で、気概と云うのもある。勿論元気の気があればこそ、そういう気兼ねが要らない言葉が存在する。やたらにダジャレ式な言葉の羅列となったが、些か驚いている。こんなに沢山の『気』を使っているとは思いもしなかった。是は多分、『気』と謂う言葉が我々の生活の中にいかに浸透しているかを物語っていて、其れは皆が生きて行く上で、呼吸と云う至って当たり前のことをしているが、健康な人であると、いつも息をしている事を気付かないで生活しているので、是と同じ様に『気』が至って普通に使われている証拠なのであろう。

中西進著『こころのことば』という本であったが、意外と小生の目論見とは外れてしまい、もっと高級な言葉集であった。然し、面白い事が指摘されていた。中国語では何でも漢字が宛てられているが、日本語は外来語が

日本語読みとなり、其れが、日本語に定着してきたものが多く、又、日本語は『物に与える言葉』ではなく、むしろ、働き言葉としての『働詞』とでもいう言葉であるという。面白い見方であると感心した。例にある『アル』という動詞は、生る（アル）、有る（アル）、在る（アル）、或る（アル）等が挙げられているが、自分と云う意味にアにルをつけると誕生、この誕生と云う意味は存在の事を指している。

先の『気』に戻るが、気分と云うのは気持ちとも云われ、人間の体が直に感じる感覚から来ている。この感覚が重く感じたり、気分が優れなかったりするのを詰めて云っている。医者に掛って、『どうも気分が悪くムカムカする』（消化器異常を訴えているとする）と云うのと、『どうも気持ちが悪くムカムカする』（心因性の疾患を訴えている）と云うので何となく違いが有りそうでもある。とは言え、気分と気持ちとでハッキリとした区別が出来るだろうか。ここで「気分」と「気持ち」を入れ替えて見ると説明が難しくなる一方である。不思議なのは、其れで医者は処方箋が書けるのである。若しかして、イライラもムカムカも区別がされていないのかも。然し、医者には他に患者の表情を読み取る（判断する＝診断する）ことが出来るからであろうか。最近の、コンピューターばかり観ていながら問診する若い先生には、この判断は出来ないと思うが。

兎も角も、日本語は微妙なニュアンスを表現しようとする感覚の凄い言葉だと感じる（『気にする』）ばかりである。

オワリ

「江上浩二の独り言」6

江　上　浩　二

岡本太郎

知の空間は人の目指す未来だ。今までに人類が経験したことのない世界、事象、芸術、感動で満たすべき空間だ。日々の人類の営み、活動、生活でこの雄大な知の空間を満たすことが出来るだろうか。その大きさ、広さ、繋がりは想像出来ない。物理的な尺度、単位、基準は3次元的な実空間を計かる手立てで、今目の前にある知の空間の軸は創造者の造るべき新しい軸で組み上げなければならないと考えている。新しい感動で、その空間を満たしたと得意げに思っても、本当は知の空間の広さは全ての新しい事象、芸術、感動を常に受け入れてくれる寛容な広さを持っており、満たすことが出来ない。常に挑戦し続けることが一番の道だ。相手の知の空間も成長し、受け入れてくれる隙間、空間を挑戦した人だけに広げてくれる。

岡本太郎は有名で、名前を知らない人は若い人か子供たちの一部であろう。私も〝あるとき〟までは、一介の傍観者で岡本太郎は有名な芸術家だと認知していただけだ。そのある時を境に私は岡本太郎に吸い込まれてしまった。思い出すと、学生時代一時、川崎高津区二子に住んでいた。その時は近くに〝岡本かの子〟という作家の碑があったことを記憶していただけで、そこは二子神社だった。その後もテレビで映し出される岡本太郎を見ていただけであった。もちろん1970年の大阪万博へは行っていない。シンボルの太陽の塔が岡本太郎制作だということぐらいが私の知識であった。時折、東急東横線で田園調布から多摩川遊園へ向かった途中の左手の高台の上にある高級住宅辺りに太陽の塔に似たオブジェがあったことを記憶している。それが岡本太郎と何か関係があるのは定かでない。岡本太郎が亡くなったころ、岡本かの子が岡本太郎のお母さんであること知った。人は死して影響を残す事が多いが、私も岡本太郎が死して、影響された1人である。そうすると、私と岡本太郎の最初のつながりは二子から始まっていたようだ。

二子から30年くらい経った最近、岡本太郎に吸い込まれてしまった状況になった。娘のいる秋田を平成17年の暑い夏も終わりかけた時期に訪れ、男鹿半島一周めぐりをした。真新しいイルカや白熊がいる水族館、入道崎、民芸館、寒風山と、年に1度あるかないかという快晴の日にめくり遭えて久しぶりの旅行を楽しんだ。子供たちの修学旅行でないが、ちょっとした自然に対する感動と、大きく私のこれからの道が影響されようとする場面に出っくわしたのだ。なまはげ民芸館で、地元の普通のおばさん説明員が、〝この秋田の赤色や青色の面をしたなまはげがあの岡本太郎さんの太陽の塔の題材になったようです。〟みたいなことを言った。このなまはげから、あの太陽の塔まで想像するとは、普通の人じゃないなとそのとき思った。

ちょうどその時期、私は〝閃きだけに終わらせたくない知的創造〟という題で資料をまとめていた。詳しい知的創造のプロセスや閃きを科学する話は飛ばして、人が何かに影響されて、次の新しい事象を創造する、考え付く、見出すという過程は、まさに人間の知的創造の原点であると再認識した。岡本太郎も然りである。しかし、なまはげと太陽の塔がなぜ連関するのだろうかと、深い沈黙に入り込んでしまっ

た。10中8・9、大方の人があるものから別なものを連想、想像することは普通であって、10人いて誰も考え付かない、１０００人いてやっと1人くらい尋常でないことを思いつく。そんな確率で新しいものは生まれていくのだろうか。発明や革新がいかに難しいことは理解されている。従来、閃いて大発明が生まれたという話を聞くが、私はそれを閃きに終わらせておきたくなかった。何か、刺激、感動が作用して新たな創造を確実にもたらすような知的プロセスがあるはずだと考えている。

　岡本太郎にすると、花道や茶道は芸の道といって、伝統的な美を伝承、継承するものに分類されるそうだ。芸術は爆発だと言ったように、芸術は常に新しいことを、今自分がいるその時代にあったものを創造することと定義するそうだ。同じ美しい、感動を与えるものでも、芸の道と芸術は違うのだ。岡本太郎を知ると、太郎は縄文土器、沖縄、伝統的な東北の様子に影響されたようだ。ご多分にもれず、彼もフランス・パリで美術をかじったようだ。フランス語も堪能だ。当時の作品、油絵も美術館に残っている。私にすると普通の、お世辞にも、他の作家よりすぐれているとは言いがたい絵であった。ところが、１９５０年代に入って、縄文、沖縄、東北にめぐり合ってからの彼の作品は違う。本物を見てみれば誰でもがわかる。原色を使いこなす、力強い太い刷毛の流れ、スピードもある、太い線で空間を創る、一筆書きのように、このころ岡本太郎の魂が定められたようである。私は探した。太郎がいつごろ秋田に足を踏み入れたのか、写真家の一面も持ち合わせていて、白黒の当時の写真がなまはげを描き出していた。１９５７年ごろのことであった。大阪の万博の制作依頼が来たのは１９６７年ごろだそうで、岡本太郎にしても、苦難の上やっと、10年を経て新しい創造を産み出せたと言ってもいい。先日早朝、岡本太郎特集をやっていたテレビ番組で〝僕は普通の人がやらないことをやる。〟と太郎が宣言していたのがやけに印象的であった。

　私の薄っぺらな理解を深めるために、秋も深まる先日、川崎生田緑地にある岡本太郎美術館に行った。作られた公園だが自然が残っており、少し坂を上って、一番奥の急斜面に太郎の作品が高い空を見据え、薄暗くところどころに陽が差し込む洞窟の空間に並べられていた。その時、岡本家と魯山人展が特別開催されていた。知らなかったが、魯山人が岡本太郎の祖父の書生をしていた時期があり、お父さんの岡本一平（漫画家）と同世代であり、影響を受けたそうである。そこで魯山人の焼物を生で観たが、私の好きな益子焼に比べて素人が作った焼物の域を出ていないと暗い美術館の中でひとり思った。岡本太郎も遊び心で楽しんだ茶の湯のために焼物に挑戦したようだが、やはり素人の器であった。芸術家は本来の自らが本当に挑戦している土俵で戦いをした方がいい。それは芸術家だけでなく、応援している周りの者にとってもいい。常に感動のある創造物を楽しみたいものだ。次に何かあるか、何が来るかと想像する楽しみだ。亡き岡本太郎は新たな作品を生まないが、まだまだ十分に感動は我々に与え続けてくれる。初めての生田への訪れは時間が足りなかった。また、しばらく時間をおいて岡本太郎に会いに行ってみよう。

平成17年11月20日記す

絹の話（91）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

豊橋に絹の製糸業を興隆させた「小渕しち」

江戸末期から明治初期の三河、遠州の繭事情

三河の国は奈良平安の昔は日本でも屈指の良質の繭生産地であったが、江戸時代末期には上州方面には養蚕、製糸などの技術が遠く及ばない状態でした。

明治政府は殖産興業として繭生産、生糸輸出に力を入れていて、三河、遠州地方も多くの家で養蚕を手掛けていました。ところが三河地方には製糸工場が無いので、繭を製糸場のある上州の方面に売りに行かねばならず、上州からは足元を見られて安値で買い叩かれ、これを何とか改善しようと地域の先進的な人達が思案していたのが明治12年でした。（明治5年富岡製糸場開設）

小渕しちの16才の決意半生

小渕しちは弘化4年（1847）群馬県勢多郡富士見村の貧しい農家の次女として生まれ、学校にも行かず、7才の頃から母親のかたわらで、見様見真似で繰糸の技術を覚え、10才の時には1人前の仕事ができるようになっていました。15才の時製糸所に住み込み見習工に出たのですが、独立の意思強く、比類のない素晴らしい技術を惜しまれながら退職したのです。明晰な彼女はその間、繭の買入れや生糸の取引なども観察していたのです。

そんなある夜明け、自分の着物一切を8キロ先の質屋に質入れして2両の金（製糸所の1年分の給料）工面して繭市場で繭を買って自分で糸を作って独立しようとしましたが、スリにお金をすられ途方に暮れましたが、人一倍の勝ち気な彼女は母親の着物1枚を質入れし18銭の元手で独立するのです。

17才で婿を迎えたのですが、その婿がのむ、うつ、乱暴、と手の付け様がない人で、しちの両親は婿の素行を繭の仲買商で、将来名主に推されようかと云う裕福な地主の部落の区長にいつも相談をしていました。（安政3年（1856）国定忠次刑死）三度流産して四度目に盲目の子を生み、その子が13才になった時、盲目の子を残して家出をしたのです。

勿論、区長の中島伊勢松も家も子も財産も身分も捨て、徳次郎と名を変えて、しちに同行したのです。

三河との出会い

二人はお伊勢参りの夫婦をよそおい、甲州、遠州を経

て二川の宿に着きましたが、宿帳から上州の人と知れると、その夜の内に「糸繰りが上手な人が泊まっている」と云う噂が広まり、長雨で逗留せざるを得ない二人を囲んで製糸技術の話しを聞こうと養蚕の篤農家や繭仲買商などが集まって来ました。

しちは二川に拠点を作る決意をして、戸籍も大厳寺の和尚に作ってもらい、役所に届けました。

しちは大工に頼んで糸繰器を作り10人の女工雇う小さな製糸場を開き、明治16年には50名の女工を擁する製糸場の経営者になっていました。

襲いかかる苦難

この頃三河地方にコレラが蔓延し、警察は流入者がコレラを持ち込んだのではないかと、流入者を調べ始めました。ある日しちの所に警察が来て、戸籍法違反、不義密通罪で徳次郎と、和尚を捕らえ、それぞれ7年、5年、刑に処せられ、しちは7ヶ月の未決となりました。和尚は3年目、徳次郎は4年目に獄死しまいました。その事を知った上州地元中村家が大厳寺に埋葬した徳次郎の遺骨を持ち去ってしまいました。

しちが警察から帰って来ると近隣の人は冷たくなり、育てた女工達も引き抜かれ、あちこち製糸場ができていました。ところが多くの女工達はしちの帰りを待っていたのです。ここで、しちもまた運命の打撃にたえて行こうと云う、強い意志を固めたのです。夫の3年忌も過ぎて、東海道線が全面開通した年、人目を避け故郷上州の夫と在所の墓参をして、帰りの宿で頼んだあんまが10年前捨てた我が子「よね」だったのです。しちはよねを引き取り婿を迎え一戸をもたせました。

逆境が成功を導き、製糸豊橋を形成

その頃になると二川から豊橋にかけて新しい製糸場が出来て、資本の関係からしちの工場は経営が苦しくなって来たのですが、しちはそれまで製糸場で引き取らない玉繭から立派な生糸を採る技をあみ出したのです。他の業者と競合する事なく、安くて入手し易い玉繭を使った新製糸産業を起こしたのです。

その糸は桐生、足利。八王子などに道が開け、その節(ふし)織物の名声は高まり丹後、加賀、越後方面から続々注文が来るようになり、輸出もされるようになりました。（男工１００人、女工１０００人）一方しちは製糸業者の組合を組織し、各種博覧会に出品して賞を受け、大正天皇に女性初の個人拝謁し、82才で永眠しました。

＊参考文献：丸山義二著「小渕しち」

楽しい時間　67

2018年4月30日

明治維新150年・・・その五

山本紀久雄

江戸無血開城によって日本の近代は進み歩んで、今年は維新150年となった。

その無血開城の功績者は誰か。という議論になると、現在、圧倒的に「西郷隆盛と勝海舟による慶応4年3月14日の会見で決した」という説が流布され、史跡が港区田町駅近くの薩摩藩蔵屋敷跡に立っている。

東京都が運営する江戸東京博物館は、JR総武線の両国駅近くにあり、徳川家康が江戸に入府以来約400年間を中心に、江戸東京の歴史と文化を実物資料や復元模型等を用いて紹介し、常設展として「江戸無血開城をめぐるおもな動き」が図示されている。

これによると鉄舟の役割は海舟から「西郷への手紙を託され、駿府にて会談、海舟の手紙を渡す」とのみ書かれている。この文面からは鉄舟は単なるメッセンジャーに過ぎないわけで、これが江戸東京博物館の見解とわかる。

そこで、2016年10月に江戸東京博物館学芸員に対し、「全生庵で保存されている鉄舟直筆の『慶応戊辰三月駿府大総督府ニ於テ西郷隆盛氏ト談判筆記』には、西郷との交渉・談判の内容と、西郷から『慶喜の命保障』、『徳川の家名存続』の確約を引き出したことが明確に記され、その結果を江戸にて大久保一翁、海舟に報告し、慶喜が欣喜したと書かれている」が、これと江戸東京博物館の図示とはあまりに違い過ぎるのではないか、と問い合わせしたところ、次のような回答が届いた。

「『談判筆記』などの資料研究を深め（他の同時代資料とのつき合わせなど）、当館のパネルや展示に反映させていければと存じます」と。

2018年1月20日、読売新聞西部版に「維新150年」記事が掲載された。テーマは「江戸無血開城」で、筆者にも取材がありコメントしたが、江戸東京博物館学芸員も「私見史論」として同紙で次のように述べている。

《江戸城無血開城は幕末維新史のハイライト。ドラマや映画で描かれるように勝と西郷が演じた役割は大きいが、2人だけで成し遂げられたわけではない。敵だらけの中、果敢に西郷との面会に赴いた山岡鉄舟や、徳川家の存続を切に願った2人の御台所――薩摩藩出身の天璋院（篤姫）と皇族出身の静寛院宮（和宮）らがそれぞれの思惑で動いた結果、実現したことを忘れてはならない》

この掲載内容、異論が残るが、鉄舟を「勝の手紙を届ける単なるメッセンジャー役」という図示から、かなり変化させている。認識転化したのか。

現在、江戸東京博物館は「改修工事に伴う全館休館」（平成29年10月1日～平成30年3月31日）中であるが、改修後の図示でどう表現されるのか、それが大きな楽しみである。

2018年1月5日の産経新聞デジタル版に、岩下哲典氏（東洋大文学部史学科教授）が「知られざる『江戸無血開城』勝海舟を凌ぐ幕末ヒーローはこの人だ！」を掲載した。

この中で岩下教授は、《「江戸無血開城」の幕府側の最大の功労者は、海舟では断じてない。山岡鉄舟である。そして二番目の功労者は、鉄舟の義兄、高橋泥舟である。海舟は三番手である。むろん、西郷は新政府側の最大の功労者であることは変わりがない。あえて言えば「江戸無血開城」の功労者は西郷と鉄舟・泥舟である。海舟は、徳川家の表向きの代表者として追認したにすぎない》

《「江戸無血開城」前夜の4月10日、慶喜は主だった幕臣を集めて別れを惜しんだ。その時、鉄舟に自らの助命と徳川家の存続、すなわち「江戸無血開城」に果たした役割は、鉄舟が「一番槍」であると称賛して愛刀を与えた（全生庵所蔵の断簡史料）。鉄舟・泥舟の苦労が報われた瞬間である》

《「江戸無血開城」の新政府側の功労者は確かに「西郷どん」である。徳川方の功労者は、鉄舟・泥舟・海舟・和宮の使者である。これまたあえて比率でいえば、西郷：鉄舟：泥舟：海舟：和宮の使者＝3：5：3：5：2：0：5：0：5であろう》

上記見解を詳しく述べた『江戸無血開城の真実』（吉川弘文館）が近く出版されるという。これも大いに楽しみにしている。

いずれにしても、岩下教授も筆者も「江戸無血開城は、駿府における西郷・鉄舟談判で事実上成されたもので、慶応4年3月14日の西郷・勝会見ではない」という見解である。

因みに、岩下教授が「一番槍」と記した鉄舟書状の全生庵所蔵断簡史料には次のように記されている。

「十一日出立前夜、御前へ被召、御手つから来国俊之御短刀拝領被仰付、是迚度々骨折候、官軍の方へ第一番ニ至り候事一番鎗だと上意有之、あり難き事ニ御座候」。

さらに、「明治維新150周年鹿児島県講座」（2月24日よみうりカルチヤー）で、NHK大河ドラマ「西郷どん」の時代考証を担当した原口泉氏が「江戸無血開城は山岡鉄舟と西郷隆盛とで成し遂げた。その後の会談はその後始末のようなもの」と解説したと、出席した山岡鉄舟研究会員から連絡を受けた。原口氏も鉄舟の功績と明言したのである。

もうひとつ証明となる史料に『正宗鍛刀記』がある。鉄舟が徳川宗家16代の徳川家達（いえさと）から賜った太刀「武蔵正宗」の経緯が記されているもので、無血開城が鉄舟の業績であると証明するものであるが、その経緯を『おれの師匠』（小倉鉄樹著）から要約する。

《明治14年（1881）、明治政府は維新の功績調査を行って、関係者を召還または口述や筆記を徴（ちょう）した。鉄舟は「別に取り立ていう程のことはない」と賞勲局の呼び出しに応じなかったが、何度も呼び出しがあるので出頭すると「先刻、勝さんが来て斯様なものを出されましたが・・・」と鉄舟に見せた。

それを見ると「勝が西郷との談判を行ったと書いてあり、鉄舟の名はない」ので「変だと思ったが、嘘だと言うと勝の顔を潰すことになる。勝に花を持たせてやれ」と「この通りだ」と海舟の功績を肯定した。賞勲局員も無血開城の経緯を知っているので鉄舟に反問した。

「それであなたの功績はどうしたのですか」

「おれか。君主に臣民が為すべきことを為したまでで手柄顔は出来ないさ」

賞勲局員は困って、賞勲局総裁の三条実美公に報告した。この続きは次月に。

漢詩研修（二十）

千代田岳精会　平井茂行

時に憩う　寛良

薪を担うて翠岑を下る
時に憩う長松の下
翠岑路は平かならず
静かに聞く春禽の声

擔薪下翠岑　翠岑路不平
時憩長松下　静聞春禽聲

【作者】 良寛（一七五八～一八三一）江戸後期の僧・歌人。越後の人。号、大愚。俗名、山本栄蔵。字は曲（まがり）。備中円通寺の国仙和尚に師事。のち、諸国を行脚し、生涯寺を持たず、故郷の国上山（くがみやま）の五合庵に隠棲して独自の枯淡な境地を和歌・書・漢詩に表現した。弟子の貞心尼編による歌集「蓮（はちす）の露」がある。

【解説】 五合庵時代の作か。農村の日常である薪取りを、良寛が詩情豊かに詩作した。転句・結句は対句になっている。

【語釈】 ※担…になう。かつぐ。背負う。※翠岑…「翠」はみどり。「岑」はみね。春の青々とした峰。※長松…丈（たけ）の高い松。※春禽…春の鳥（鶯であろうか）。

【通釈】 自分の体力としては多めの薪を背に春の峰を下る。美しいみどりの峰であるが狭い路がやけに凸凹している。そびえたつ松の下に休んでいると、鶯の声が聞こえ疲れをなごませてくれる。耳を澄ますとあたりの静けさがひときわ深く感じられる。

『良寛さんの和歌・晩年の恋』

中屋保之

良寛さんの草庵に、貞心尼が訪れるようになる。良寛さん七〇歳、貞心尼二九歳。仏道の師とその弟子。良寛さんの亡くなるまでの三年間の和歌が残されている。

草枕夜ごとにかはるやどりにも結ぶは同じふるさとの夢

ふるさとへ行く人あらば言(こと)づてむけふ近江路をわれ超えにきと

この宮の森の木下(こした)にこどもらと遊ぶ春日は暮れずともよし

さすたけの君のすすむるうま酒にわれ酔(ゑ)ひにけりそのうま酒に

なにとなく心さやぎていねられずあしたは春のはじめと思へば

心あらば尋ね来(き)ませ鶯の木伝(こづた)ひ散らす梅の花見に

鉢の子に菫たんぽぽこきまぜて三世(みよ)の仏にたてまつりてな

夢の世にかつまどろみて夢をまた語るも夢もそれがまにまに
（夢のような儚い世の中で、うとうとと夢を見のも良し、夢から覚めて語るのも良し、成りゆきにまかせて）

梓弓春になりなば草の庵をとく出て来ませ逢ひたきものを
（春になったら、庵を出て、私の所に来てください。早く会いたい）

水や汲まむ薪やこらむ菜や摘まむ秋のしぐれの降らぬその間に

月はよし風は清けしいざ共に踊り明かさむ老ひの思ひ出に

何時いつと待ちにし人は来りけり今は会ひ見て何か思はむ
（いついつと待ちわびた人、やっと逢えた、こんな嬉しいことはない）

武蔵野の草葉の露のながらへ果つる身にしあらねば

生き死にの境はなれて身にもさらぬわかれのあるぞ悲しき

形見とてなにかのこさむ春は花夏はほとぎす秋はもみぢ葉

「歴代天皇御製歌」（八十九）

貫名海屋資料館

「大正天皇」②（大正四年―一九一五―三十七歳）

梅雨

餘りにもふる梅雨（さみだれ）のはずれして思ひやらるゝ民のなりはひ

あつさ堪へがたき日に

民草を思ひこそやれまつりごと出てきくまも暑きこのごろ

國民の上やすかれと思ふまはあつさもしばしわすられにけり

雷

鳴神のおと近づきぬ山のはに一村雲の立つとみしまに

この年はいかにと思ひし麦のほのみのりゆたかにみゆる山はた

擣衣（きぬた）

里人の上を思ひてねぶられぬ枕にひびくさよきぬたかな

秋鳥

色づける庭の柿の實ついばむと今日もひぐらし小鳥よりくる

樵路雨

柴人のかへる山路雲とぢて夕さびしくむら雨（さめ）の降る

和布（わかめ）

白波のあらひしわかめ今日もまたわが夕みけにもて参るらむ
浪あらきいその岩間にあまの子が和布刈るらし船よするみゆ

をりにふれて

夕立のなごりかわかぬ高殿のをすに（簾）螢のひとつすがれる

賢所

霜むすぶかしこどころの松の上にこほりてのぼる月のさやけさ

厳寒

たへがたく寒きけさかな筆をもつおよび（ゆび）の先も氷るばかりに

寄國祝

年どしにわが日の本のさか行くもいそしむ民のあればなりけり

御津磯夫短歌鑑賞　6

「月虹」　鮫島　満

泥棒は訪ね来たらず物くるる置き泥棒が二人ありけふも

御津磯夫『かうしんばら』昭和五十五年

一見、入った盗人が盗るものがないのをあわれんで持っていたものを置いて行ったという意味のように思われるが、結語「けふも」によって、そうでもないようにも想像される。作者は本名今泉忠男、斎藤茂吉、土屋文明門下の歌人で、歌誌「三河アララギ」の創刊者である。本業は開業医であって、他の多くの歌から想像するに、伝説の人情医「赤ひげ」のように、金のない患者からは診察料をもらわず代わりに野菜や果物などを受け取っていた人のようである。

そこで右の一首に戻ると、「置き泥棒」はふだんの診察料として留守の間に何かを置いて行った人のことだということになる。この歌の後には、

甘藍ひとつ小さきを双手に受けとりて田からものぞと声をあげにけり

がある。主語を作者だとすると、この甘藍も患者からの診察料代わりのものといういうことになる。また、作者には「夕映えの投薬口に置かれたる袋に春の浅蜊哭くこゑ」という歌がある。これも医院の投薬口は開いてはいるが人けがないのでそこに近くの海で採ったばかりの浅蜊を診察料として置いて行った人がいるという意味であり、まさに置き泥棒を詠んだ歌ということになる。なお、他の歌によって、投薬口にはふだんはご夫人が座っていることがわかる。

また、その後の歌に、「浅蜊採りにゆかば頭痛の治ること指示して春の浅蜊を貰ふ」（『月下の華』昭和五十八年）がある。頭痛を訴えてきた患者を気晴らしに浅蜊を採りに行かせ、それを診察料として手に入れたというのである。

こうして読んでくると置き泥棒は作者が育てていることになろうか。

「氷魚」のことから（209）

岡本八千代

今は「清明」という季節とか。清明とは、すべてのものが清らかで生き生きとする頃のこと。（「日本の七十二候を楽しむ」より）

庭の木々の若葉が萌えだし、草々が風にゆれている。五月五日の節句もま近い。私は、もう柏餅を二つも食べて、このムクゲ庵にきた。子規の歌に、

〝白妙のもちひを包むかしは葉の香をなつかしみくへど飽かぬかも〟

〝かしは葉の若葉の色をなつかしみここだくひけり腹ふくるるに〟

があって、子規の食いしん坊が私と似ている。

今回は、子規のフモール（ユーモア）について触れてみたい。

子規は明治34年になって、「墨汁一滴」を発表した。（五味保義著「子規といふ人」参考）

「痛むにもあらず痛まぬにもあらず。雨しとしとと降りて枕頭に客なし。古き雑誌を出して星野博士の「守護地頭考」を読む。十年の疑一時に解くるうれしさ、冥土への土産一つふえたり。」（五月二十日）

△「守護地頭」＝諸国に配置された人の刑罰などを守る人。

※閻魔大王と子規との会話…。

子規が閻魔大王の卓子の下に立って、

「私は根岸の病人何がしであるが最早御庁よりの御迎えが来るだろうと待っていても一向に来んのはどうしたものであろうかそれを聞きに来たのである。と訳を話して丁寧に頼んだ。

大王は、もう四年も前、明治三十年五月に帳消しになっている。その時迎えに行った青鬼を呼んで聞いてみると、根岸の道が曲りくねってゐて家がわからず引き返した。—ことが分った。

その時、傍から地蔵様が、「事のついでにもう十年ばかり寿命を延べてやりなさい」と言い出したので、子規はあわてて、「この頃のように痛み通しでは一日も早くお迎えを待っているので、十年も苦しめられてはやるせない」と言った。

大王は、同情したらしく、それでは今夜すぐ迎へをやると言う。

「今夜は余り早うございますな」

「それでは明日の晩か」

「そんな意地のわるい事をいわずに、いつとなく突然来てもらいたいです。」

大王は、せせら笑いして、「よろしいそれでは突然とやるよ。しかし突然という中には今夜も含まれているという事は承知して居てもらいたい。」

「魔王様、そんなにおどかしちゃあ困りますよ。（この一句菊五調）

閻王からから笑ふて

「こいつなかなか我儘ッ子ぢゃわい。」（この一句左団調）

拍子木　　幕（五月二十一日）

この歌舞伎調の面白さ。子規のユーモアよ。

磯辺　耐

みなさまへ㉑

「土日は、リハビリなしか…。」っとへコんでいたところ。

外来のリハビリが始まる前に、来てくれました…。

先生、行かないで～。

鏡で先生と同じポーズをしているとほのぼのします。

ほんと、体幹ばっちりですよ

本当に、まずは3ケ月、おとなしくしてて下さい。

←毎回言われる…。

みなさまへ㉘

最後の夜も、大部屋へあそびに行きます。そこで早速…

歩いて帰る気、満々でしたが、少し迷いはじめました。
明日の朝の感じで決めたいと思います…。
何かのご縁でお会いできたお部屋のみなさまとの
お別れ…(くすん)いろいろなお話ができて、お互いにはげ
ましあって…。がんばれました!! 一足先に退院です…。

編集室だより【二〇一八年四月】

○湯ヶ原の〝ケアホーム〟へ見舞にゆく。しばらく皆さんとお話をし、厚く見守られていることに安心。介護されるスタッフの皆さんに頭がさがる。

○湯ヶ原の山、階段を三百六段登ると〝椿寺〟。薮椿系、栽培系…ひと山を尽して椿。誰も居なくて、日蓮聖人由来の不思議な空間に、不思議な気持。いったい何だったのだろう。

○明治神宮「正式参拝」。明治神宮神楽殿において、神楽舞を奉納。清らかな鈴の音。大太鼓が身に響く。御神酒。なにもかも神々しい。

○千代田フィルハーモニー管弦楽団。紀尾井ホール。ドイツの歌劇作曲家「リヒャルト・ワーグナー」の「ジークフリート牧歌」。遠くに聞こえる牧場の角笛、鳥の声などが聞こえる愛らしい曲。オーストリアの「ブルックナー」、交響曲、第7番、ホ長調。第1楽章は、原始霧のなかから、宇宙の広がりを。第2楽章、ワーグナーチューバとホルンによる葬送曲。第3楽章、スケルツォ。第4楽章、ゴシック様式教会建築の荘厳。祈りの音楽の完成でした。角岳史氏指揮。清らかさ、心強さ、充実さ、浸っていました。

○隅田川吟行。集合時間より早い時間に着いたから浅草寺を参拝して…。隅田川七福神を宝舟にお乗せす絵をみつけた。江戸文化年間に始まったのだという。

大国神（インドの神様、打出の小槌で財福や食物を）
布袋尊（中国に実在した禅僧。無邪気で欲がなくおおらかな性格で、度量を）
弁財天（インドの神様、唯一の女神。財福、学問、芸術を）
福禄寿（中国の神様、幸福、金銭、長寿を備え、人徳や人望を）
寿老神（人の寿命を記した巻物のついた杖を持つ中国の神様、長寿や延命を）
毘沙門天（インドの神様、四天王の一人。勇気や威厳を）

向島花街、弘福寺前の「河原のあべ」。揚げたて、熱々、旨々天プラ。長命寺の三枚葉につつまれた桜もち。古民家、ワインショップ。とてもうれしい事々に分入った日でした。

○飛鳥山博物館へ、滝野川牛蒡を見にゆく。あまりに黒くて長くて、びっくり。「もっと知らなくてはいけない」と思った。

○田園調布高台、蓬莱公園や多摩川台公園など次回吟行の下調べにゆく。多摩川が武蔵野台地を削り取って出来た国分寺崖線、地下水面が露出する湧水、関東ローム層と、砂層、砂礫層…。4～5世紀に造られた亀甲山古墳、宝莱山古墳…多摩川台古墳群が8号墳までもあり…限りない興味の対象に出会ってしまった。

野菜・まんだら

（4）滝野川牛蒡・牛蒡

○平安時代には渡来していた。
○ユーラシア大陸北部に野生するキク科ゴボウ属、多年草。
○とげのある総苞の粘液で動物などに引っかかることで種子が散布される。
○江戸時代、滝野川村で、改良、採種され、中仙道の種苗商から、全国に広まった。
○滝野川辺りは、土壌がやわらかく、水はけも良く、直径２～３cm、長さ80cm～１mほどと大きい。
○滝野川牛蒡の３年子、３年目にならないと花が咲かない。
○皮の部分に良い香りがあるから、皮はむかないこと。
○血圧上昇を抑えるカリウム・貧血を予防する鉄・カルシウムと共に骨の合成を助けるマグネシウム、亜鉛などミネラルに富む。
○水溶性と不溶性と両方の食物繊維を豊富に含む。
○血糖値の上昇を穏やかにし、コレステロールの吸収を抑制。
○アルゼンチンのカンポに生えていた野生の牛蒡で、キンピラや炊き込みごはんで日本を偲んだ日があった。

○滝野川地区には、黒く太い滝野川牛蒡に似せた、香り豊かな「ロールケーキ」のお店があり、
○滝野川牛蒡での「牛蒡ビール」も美味しい。

森岡・今泉

第三十二回

全国短歌フォーラム in 塩尻

短歌に出会えるまち「塩尻」。短歌で思いを表現する文化を大切にし、短歌のすばらしさを全国に発信しています。

題詠「テレビ」

※「テレビ」の単語を詠み込まなくてもよい

投稿歌募集

申込締切 6月20日(水)

ホームページからも投稿できます。

■応募規定　一人二首まで。自由題一首と題詠歌一首の合計二首(どちらか一首でも可)
題詠「テレビ」※投稿は自作未発表作品に限る

■投稿料　1,000円(一人あたり、一首二首同額)

■作品集代　1,000円(希望者投稿時注文ください)

■応募方法　所定の投稿用紙か400字詰め原稿用紙の右半分に作品・左半分に住所・氏名・電話番号・当日参加の有無を記入し送付ください。

■払込方法　定額小為替(郵便局で購入)を投稿歌に同封するか郵便局備付払込取扱票で「口座番号00560-6-83649 全国短歌フォーラム実行委員会」に振込

■申込締切　6月20日(水)(当日消印有効)

■主催　長野県塩尻市／塩尻市教育委員会／全国短歌フォーラム実行委員会

■大会期日　9月29日(土)・30日(日)

■会場　塩尻市文化会館 レザンホール

■選者　馬場あき子 氏・佐佐木幸綱 氏・永田和宏 氏
投稿歌選評、表彰式、記念講演会

■大会内容　最優秀・優秀・入選・奨励賞

■表彰　フォーラム当日と市ホームページ上

■発表　〒399-0738 長野県塩尻市大門7-4-3

■申込先　全国短歌フォーラム事務局
電話　0263-52-0903(直)
ファクス　0263-53-7604

※ご連絡くだされば募集要項(投稿用紙)をお送りいたします。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL　(〇三)　五九二四-二〇六五

◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行　今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制　廃止。

◇新しく購読を希望される方　一ヶ年五千円。

◇振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九

◇原稿送付先　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。